

読むとはどういうことか
一石原千秋『読者はどこにいるのか』を読む一

提題者 唐露

私たちは日ごろ読書をしています。漫画やSF小説に夢中になって寝食忘れることもあり、小説や哲学書を解説するつもりだったが、「分からないこと」に出会ったこともあります。普段では、私は「村上春樹は面白い」と思ったり、「どのように西田を効率的に読むか」と考えたりすることがありますが、「読むとはどういうことか」を考えたことはめったにないと気づいた時、びっくりしました。今日、この場を借りて皆さんと一緒に「読むとはどういうことか」を考えていきたいと思います。ご一緒に「分からないこと」に出会うために、二つの問いを用意させていただきました。

①小説において「真理」は「作者」の側にあるのか、それとも「読者の数だけ真理がある」のか。

②哲学書において「真理」は「作者」の側にあるのか、それとも「読者」の側にあるのか。

さて、順番通りに辿りましょう。

①小説において「真理」は「作者」の側にあるのか、それとも「読者の数だけ真理がある」のか。

それは言い換えれば、小説などの「作品」は作者がメッセージを伝える道具なのか、それとも、読者が自分の好きなように解釈できるものなのかという問いになります。近代文学研究では、前者が「作家論」（「作品論」）の立場とされ、後者が「テキスト論」（「読者論」）の立場と呼ばれています。『読者はどこにいるのか』において、「作家論」パラダイムにおいては「真理」は作家の側にあるのだから…読者は自分を消して作家の「真理」に触れたと感じられさえすればよかったからだ」と説明されています。

それに対して、「テキスト論」の先駆であるロラン・バルトは「あるテキストの統一性は、テキストの起源（作者：引用者）ではなく、テキストの宛先（読者：引用者）にある」といい、「読者の誕生は、「作者」の死によって上らなければならないのだ」と主張しています。つまり、彼にとって、現実の作者はテキストにはいないし、現実の読者もテキストにはいないのです。「作者」はテキストの言葉として機能しているだけであり、同様に「読者」は抽象的な「読む主体」として、読んでいるその時に機能している働きに過ぎません。だから「作者」は「読者」が今・ここでどのようにテキストを読むかに関与することはできません。「テキスト論は言葉、言葉、言葉だ。さまざまな言葉を繋げていく。しかし、作者にだけは分析のベクトルを閉じておくのがテキスト論の立場なのである」と説明されています。したがって「小説の読者は、作者のことを忘れて、自分の好きなように解釈できる自由を手にすることができる」のです。

ところで、私たちはここに一つの疑問にぶつかるでしょう。「作者の意図」があからさまに書かれていると思われる「哲学書」は、「小説」と同じく、「真理」が「作者」ではなく「読者」の手の中にあると考えられるのでしょうか。これが第二の問いです。

②哲学書において「真理」は「作者」の側にあるのか、それとも「読者」の側にあるのか。

この問題は、「哲学書を読む」ことと「小説を読む」こととはどう違うかということにもなるでしょう。テキスト論は「言葉」を研究します。テキスト論の立場からすれば、「読者」は<今・ここ>テキストを読んでいる時だけが「読者」です。それは「テキストの外にいる現実の読者」ではありません。もちろん「この場合の「読者」は現実世界に実在している読者と全く手を切っているわけではないが、現実世界からは相対的に自立しており、小説テキストの呼びかけに応えるような「読者」である」とされています。この点で、哲学書であろうが小説であろうが、「読む」ことは同じです。つまり、テキストの内部において「読者」のできる仕事、即ち「読者」として機能することは同じです。ようするに、テキスト論はテキストの内部を仕事の場とすると考えられます。

ところで、私たち「読者」は、読んでいる時だけが「読者」ではありません。本を読み終わったあと、私たちはテキストからもらった感動を味わったり、テキストから与えられた問題を考えたりします。「読者」はまた「人間」として生きています。テキスト論の立場からすれば、それはテキストの外部の世界、つまり「現実の世界」のことです。テキスト論はそこを問題としません。「テキスト論では、文学テキストは現実世界から相対的に自立している」ので、現実の世界を問題としないのが当たり前です。ところで、本を読み終わった後、「読者」の役割が果たした後、私たちは何者なのでしょう。

そもそも、私たちはなぜ哲学書を読むのか。哲学問題に関心があるから、真理を知りたいから…理由はいろいろあるでしょう。裕智樹によれば、哲学を研究することは、「文献に基づき（過去の）哲学者の思想を理解すること（＝哲学書を読むこと）」であると共に、「哲学の諸問題に直接みずから取り組むこと（＝考えること）」でもあります。例えば、私たちが西田の論文を読んでいる時、彼が考えようとした問題と直接に関わることがあるでしょう。そして、テキストにおいて西田が考えようとした問題を<自分の問題>として「考える」こと、「体験する」こともあるでしょう。それはテキストの内部でしょうか、それとも外部でしょうか。内と外の境界線が溶けるところもあるでしょう。ようするに、「哲学書を読む」ことは、テキストを理解することであると共に、自由に「考える」ことでもあるでしょう。もちろん、「小説を読む」ことも同様であるように思われます。「作品は読者が自分自身に出会う場所」であって、「読書行為とは、読者が自分自身をたえず読んでゆくプロセス」（大橋洋一）だという言葉が胸に響いています。小説、哲学書を「読む」とはどういうことか。そのことを通じて「人間」を考えて見たいと思います。